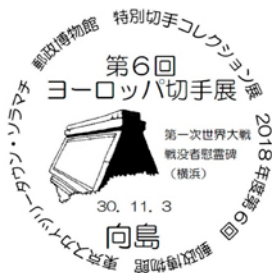

2018年度 第6回

郵博 特別切手コレクション展

第6回ヨーロッパ切手展

展示作品解説パンフレット



主催

郵政博物館、特定非営利活動法人郵趣振興協会

展示団体

ヨーロッパ切手展実行委員会

後援

無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

開催日時

2018年11月3日(土) 13:00-17:30

2018年11月4日(日) 10:00-17:30

会場：郵政博物館

主催者ご挨拶

ヨーロッパ切手展は、2013年に始まった、欧州に関連するフィラテリーを展示する無競争公募切手展です。

毎年一つその年にふさわしいテーマを決めて開催しており、第6回となる本年は、100年前の1918年に終結した「第一次世界大戦」をテーマにいたしました。

会場では、本パンフレットに掲載した11作品に加えて、特別展示として、青島軍事切手最大マルチプル、徳島県坂東ドイツ人捕虜収容所切手・葉書、旧ドイツ領南洋諸島回収の不発行記念切手などの展示も行います。なお、この展示にあたり、山田 祐司 様のご協力をいただきました。改めて御礼申し上げます。

第6回ヨーロッパ切手展実行委員会

榎 沢 祐 一

過去のヨーロッパ切手展のテーマ

第1回	黒海	2013.1.19-20
第2回	スイス	2014.10.10-11
第3回	バルト三国	2015.10.11-12
第4回	フランス	2016.10.29-30
第5回	バルト海	2017.12.9-10

第一次世界大戦 (5)

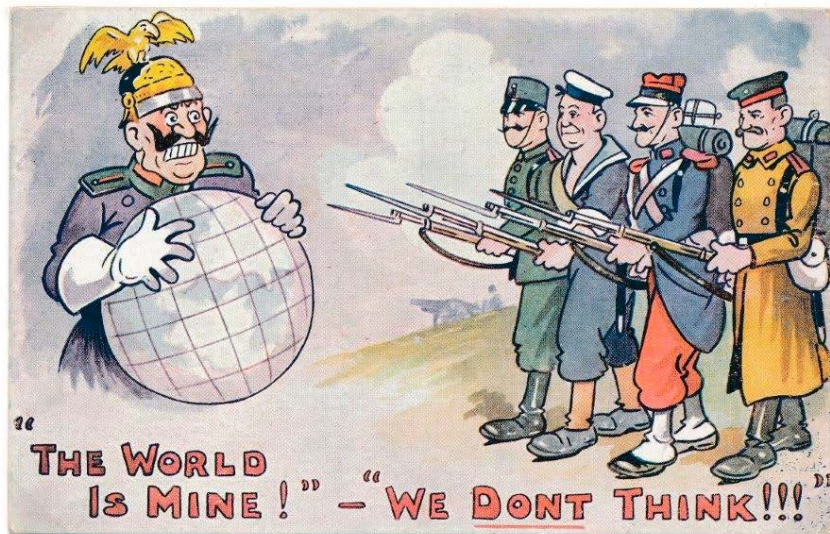
樋口 豊

第一次大戦は、6千万人以上の兵士が戦い、将兵の戦死1千万人、負傷者2千万人、一般市民も1千万人が命を奪われた人類最初の「世界戦争」だった。これだけの惨事をもたらした大戦の原因はどこにあったのか？そして、どのように戦い、惨禍をもたらした戦争の近代兵器とは。また、どこで、どのように戦いが行われたのか？

第一次大戦についての率直な疑問をそのまま「作品構成の主体」とし、遺された絵葉書、軍事郵便、切手で物語を「オープン展」スタイルで作成しました。2008年、(公)第9回「オープン切手展」金賞受賞作品。

「帝国主義列強による地球分割競争」

(英国製)



「世界は俺のものだ！」

「俺たちは、そうは思わんぞ」

第一次世界大戦の推移 (1)

北村 定従

第一次世界大戦前夜、一触即発の情勢下のバルカンは「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた。第一次大戦の原因は、オーストリア皇太子夫妻がセルビアの青年に暗殺されたサライエヴォ事件である。連合国（イギリス・フランス・ロシア）と同盟国（ドイツ・オーストリアなど）の衝突により初の世界的規模の戦争となった。

1914年7月、オーストリアはセルビアに宣戦、8月ドイツはロシアに宣戦した。ドイツはフランスの短期打倒をはかるも、9月マルヌの戦いで攻勢は挫折し、膠着状態となった。8月に日本はドイツに宣戦布告し、ドイツが持っていた中国の利権を奪った。西部戦線での最大激戦ヴェルダン要塞の攻防は、16年ドイツ軍の強襲にフランス軍が守り抜いた。アメリカはドイツの無制限潜水艦作戦を理由に17年4月参戦、戦況は連合国側に有利に展開された。東部戦線では、ドイツは14年8～9月のタンネンベルクの戦いでロシア軍を壊滅させるも、広大な領土・厳寒に苦しみ、厭戦気分が蔓延した。

18年11月ドイツ革命がおこり、共和政が成立した。臨時政府代表がコンピエーニュの森で休戦協定に調印し、大戦は終結した。



葉書で読み解くフランスの第一次世界大戦 (2)

大橋 尚泰

通常、郵趣では切手や消印が趣味の対象となりますが、筆者も属するフランスの消印愛好家協会の会員の間では、通信内容も重視し、「郵便物の文面を通じて歴史を見る（再構成する）」というアプローチを取る人も少なくありません。いうまでなく、葉書や手紙を書いた本人は、内容を伝えたくて書いているわけであり、そこに貼られた切手や、押された消印というのは副次的なもので、これだけを集めるというのは（郵趣ファンには怒られるかもしれませんが）本来は本末転倒だともいえます。もちろん郵趣による知見も貴重であり、たとえば切手や消印のわずかな違いによって、日付のない郵便物の年代を特定することも可能になりますので、そうした知見は歴史学でももっと活用されるべきだと思います。しかし、同時に、「エンタイヤ」の延長線上として、葉書の「裏面」や封筒の「中身」に注目してみるのも、おもしろいのではないかと感じています。本展示では、先日刊行された拙著『フランス人の第一次世界大戦—戦時下の手紙は語る』（えにし書房刊）を抜粋して展示することで、郵趣と歴史学との関係について考えるきっかけとできればと考えております。



第1次世界大戦の英領インド遠征軍郵便史(2)

榎沢 祐一

1914年に第1次世界大戦が開戦すると、英領インド帝国（以下、インド）は、イギリスの懐柔策もあって民族主義者を中心にイギリスへの支持を打ち出し、その要請に従ってヨーロッパから中東の幅広い地域にかけて遠征軍（An Indian Expeditionary Force (I.E.F.)) を派遣しました。戦後に大幅な自治を認められる期待に基づくものでした。

本作は、第1次世界大戦の戦況の推移に即して、インド遠征軍の郵便の動向をまとめました。「遠征軍」と言うと勇猛果敢に攻め入る印象を受けますが、実際インド軍は、イギリス軍の兵力を補う役割として、西部戦線に加え、中東、メソポタミア、アフリカと広域に派遣された上、他の連合国諸国と同等以上に苦難を強いられました。

この苦難の経験が、ガンジーによるインド独立運動への遠因になっているだけでなく、現在のインド人における英米への複雑な感情にもつながっており、日中印3か国間の関係にも影響を及ぼしていると言われています。約100年前の出来事ではありますが、現代、そして我が国へも影響を及ぼし続ける第1次世界大戦の一端をご覧ください。



西トルキスタンと捕虜郵便 (1)

藤井 行康

西トルキスタン地域は、第一次世界大戦では直接戦場にはなりませんが、それでも多くの人々が戦場に行きましたし、捕虜収容所も30の都市に作られました。

収容所の受付印については、複数のタイプがある収容所もありますが、受付印自体が無い収容所も複数あると思われます。一部の収容所では、捕虜差出しの郵便であることを示す印も使用されました。

葉書については、様々なものが使用されました。西トルキスタン独自の葉書としては、収容所名が入ったタイプが2種類知られているほか、ペトログラードタイプと呼ばれるもので、TypK（トルキスタンの略）の文字が入ったものが2種類あります。

また、収容所専用ではありませんが、TypKの文字と双頭の鷲が印刷された葉書も使用されています。捕虜郵便の検閲については、基本的に総督府が置かれたタシケントで行われました。（通常の郵便物は、他の都市での検閲もあります。）

なお、本作品は、捕虜に関わる郵便物を中心として構成していますが、第一次世界大戦のイメージが膨らむよう、軍事郵便などのマテリアルも少し含めました。



捕虜通信表示印が押されたカバー（アンディジャン収容所）

日英同盟二十年史 (1)

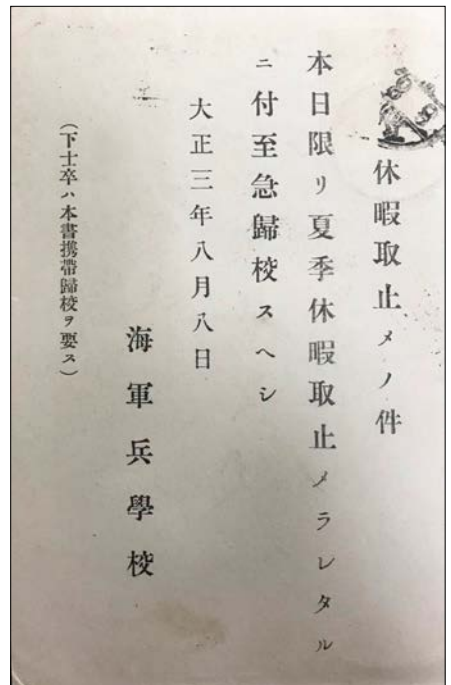
虎頭 雄彦

日本人にとって第一次世界大戦は、直接国土が甚大な被害を被った第二次世界大戦とは異なり、主戦場が欧州であったために「遠くの戦争」、或いは青島攻略戦など「参加した作戦がある戦争」というのが印象ではないでしょうか。

しかし、その遠因をたどれば日露戦争での日本の勝利があり、連合国勝利の陰には日英同盟があり、そして戦後日本の国際的な地位向上に対しては新たな国際秩序が形成されるなど、「遠くの戦争」「参加した作戦がある戦争」という印象以上に、実は日本の影響も大きかった戦争でもありました。

この作品は、そんな日本と第一次世界大戦の関係を、それを支えた日英同盟を軸に展開したテーマチック作品です。同盟の成立と前史としての日露戦争にもふれながら、第一次世界大戦での日本の同盟協力を中心に、日英同盟20年を1フレームにまとめました（一部に絵葉書や通信文も使用しました）。

1フレームの小品ですが、ロシア・バルチック艦隊に給炭したドイツ商船差出郵便、ロシア・ウラジオ艦隊による捕獲郵便物、第一次大戦勃発による海軍兵学校の休暇取り止め通達（写真）、坂東切手2種など、希少な時代の証人（マテリアル）たちも盛り込みました。



日独戦争の軍事郵便 (3)

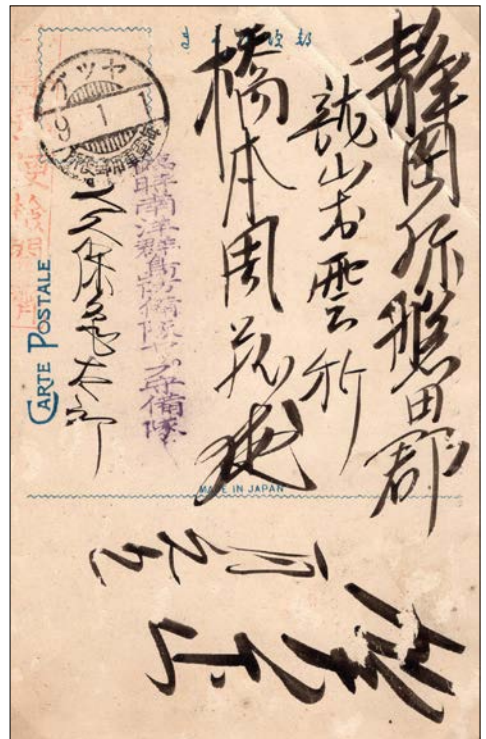
玉木 淳一

この展示での軍事郵便の定義は郵便史で言うところの広義の「軍事郵便」で、その中には狭義の「軍事郵便」（「軍事郵便規則」によるもの）及び「俘虜郵便」（「俘虜郵便規則」によるもの）が含まれている。

軍事郵便は戦地と内地を結ぶ郵便制度で戦地からは郵便料金免除、戦地へは国内料金が適用された。俘虜郵便は俘虜事務に関し俘虜情報局が発受する郵便、俘虜が発受する郵便で郵便料金は免除された。

日独戦争における軍事郵便取扱開始は1914（大正3）年8月27日である。山東半島方面では1921（大正10）年3月31日まで、南洋群島方面では1922（大正11）年3月31日まで軍事郵便の取扱が実施された。

最初の2フレームで山東半島への出兵、艦船郵便所の開設、地名入り野戦局への改称、南洋群島の占領（陸上局の設置）、山東半島での普通局設置、軍事郵便局の設置、山東鉄道の接收、連合国としての艦隊派遣と時系列的に変化していく様々な顔を持つ軍事郵便の多様性を示し、第3フレームでは日本各地に設置された俘虜収容所の中から特徴的な俘虜郵便、赤十字通信、価格表記郵便を示した。



第1次世界大戦後のインフレーション (8)

伊藤 文久

第一次世界大戦後、敗戦国のドイツ・オーストリア・ハンガリー及び、旧ドイツ領・旧オーストリア領・旧ロシア領から、国土を回復したポーランドでインフレが発生しました。

ドイツ：1922年1月に2マルク (Mark) だった国内書状が、1923年12月には1,000億マルクと、500億倍 (21料金期間)。

オーストリア：1921年2月に2クローネ (Krone) だった、国内書状が1924年12月には1,500クローネと、750倍 (10料金期間)。

ハンガリー：1922年1月に2.5コ罗纳 (Krona) だった、国内書状が1925年1月には2,000コ罗纳と、800倍 (13料金期間)。

ポーランド：1922年1月に10マルカ (Marka) だった、国内書状が1924年3月には252,000マルカ相当と、2万倍超 (16料金期間)。

郵便史の手法で、ドイツ・オーストリア・ハンガリー・ポーランドの4か国を、それぞれ、各2フレームずつ、時系列で、実際に郵便に使われた郵便物を展示し、インフレの進行が感じ取れるようにしました。郵便物は、国内書状を中心に、葉書・書留・印刷物・外国書状・外国葉書・外国書留など出来るだけ色々なバラエティを示しました。



作品名：Slovenia 1919-1920, the First Issue (5)

榎沢 祐一

世界の切手収集家には鎖を切る男性像を描いた切手が、「チェーン・ブレイカー」という愛称で呼ばれており、スロベニアとチェコ・スロバキアで発行されています。

このコレクションでは、スロベニアの方の切手を扱っており、鎖を切る男性は、第1次世界大戦後にオーストリア・ハンガリー帝国からの抑圧から国家独立を果たした姿の象徴とされています。また、同時期に発行された切手は、鎖を切る男性像だけでなく、キューピッドや女神など同様に独立を象徴する図案が採用されており、これらもコレクションしています。

ヒジャーズ王国 (5)

吉田 敬

1919年6月、第一次世界大戦で英国側につき、オスマン帝国に反旗を翻したハーシム家一族のフサインは地域を制圧し独立を宣言。これに伴い、8月20日に一番切手を発行したのがアラビア半島最初の切手発行国ヒジャーズ王国です。

同国は、1925年にサウド家（現在のサウジアラビアの王家）により制圧されたデッドカントリーですが、本展示はその全ての切手の伝統郵趣作品で、世界切手カタログのメインナンバー全てを展示した上で、製造面の区分に注力しました。

プラハ城切手 (3)

奥山 昭彦

チェコスロバキアは、オーストリア・ハンガリー二重帝国の第一次世界大戦での敗戦を機に独立し、1918年にファーストイッシューである「プラハ城切手」を発行しました。

独立直後の混乱期の切手だけに、版、目打、用紙、刷色等の製造面と、旧宗主国切手との混貼（いわゆるコンビネーション使用）、消印、頻繁な郵便料金の改定等の使用面と郵趣的な分類要素の殆どが含まれています。

特に製造面の分類要素は、20世紀の切手でありながら諸外国のクラシック切手にも劣らないもので、プラハ城切手の面白さの中核となっているものと思われます。

今回出品したプラハ城切手は第一期発行の Captioned 図案と称されるグループで、プラハ城切手をデザインしたアルフォンス・ミュシャ（Alphonse Mucha）の原画を最も忠実に再現したものでした。

プラハ城切手で最初に出現したグループゆえに、独立直後の混乱期の様子が顕著に現れているグループで、製版が稚拙であったためにプレーティングが最も容易であるとともに、旧宗主国切手とのコンビネーション使用など豊富で、使用面でも変化に富んでいます。

